WASON
HQ
1104
J74+

THE WOMAN'S MAGAZINE.

NOV 1887

女學雜誌

明治二十年十一月廿六日刊行

毎土曜日發兌
一冊正價五錢
府內無郵送稅

第八十六號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 86. November 26th, 1887.

第八十六號

EDITORIAL:—On Re-marrying, Widows, and Old Maids.

LEADING ARTICLES:—Secret of Well Pressing and Use of Cosmetic, by Rev. Kimura; A View on the Moral Education in the Grammar School: No. II.—by Senator H. Kato; Destruction of Human Body by Drinking: No. II. by Mr. S. Tsuda.

MISCELLANIES:—Japanese Literature: No. VII; On Japanese Drawings.

CRITICAL NOTICES:—"Movement of Western Ladies;" "Ladies Etiquette."

BIOGRAPHIES:—Prascovia Lopouloff: No. II Goeth's mother.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

●社說　再嫁寡婦及老孃（第一）再嫁の善惡を評す

●論說　金屋の秘訣（木村熊二）○德育に付ての一案（加藤弘之）○酒の害（津田仙）

●叢話　和文學講義（鈴木弘恭）○和歌講義（八木兼辰）

●批評　西洋婦女立志篇○婦女のかざし

●傳　ツイベリアの女傑○ゲーテの母

●寄書　文苑（鈴木弘恭大人撰）○愛の歌の譜　新作（夢の屋かをる）

●新報　十五件

●珊瑚の珠（第四十二回）

○リッコボニス夫人曰く男子は古來十分の敎育を受けたり然るに婦人は其自身の心を以て敎師と爲し學の成敗一に此の心の何如に任じたり

○アダムス曰く女權伸張過激の論者達は宜しくシェクスピアをも其味方と爲し玉ふべし翁はポルシアと云へる一婦人の性質を畫くとき之に尤も强膽ある心をば附與したれバ也

○ロバートブローニング曰く何人の腦中にも一つの幻想あらん此の幻想は公義、慈悲、才能及び惡者並びに痛めるもの一對するの信切等を慕ひ求るものあり而して不思議あるは此の幻想一個の實躰を得て女子といへる人間と爲り世に存せり

○嫉妬は婦の七去の內にて女たるもの愼しむべき第一たりといへども十にして八九はあり何れにも女の疾なりさて文字も病冠にしたがふたり唐土一人の夫ありて常に水神の賦を誦せり其婦甚れだ水神を妬みて死して後ち其身水神となりたりしと陳尾公が故事堂珍に見へたりとまた五雜俎にも吳興の桑乞之妻死而內夫再娶白日現形刀割勢とありしとおかしからずや（雨窓閑話）但し支那の敎にて嫉妬を禁ずることの嚴なる之によりて知らるべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第八十六號　明治二十年十一月廿六日

●社説

○再嫁、寡婦、及び老孃

（第二）再嫁の善惡を評す

或人問ふて云く孀婦は禮に於て娶らざる者に似たり何如にせば宜しかるべく候か、伊川先生髯を扭つて答へて曰く凡そ娶るは即はち身を配するとあり故に貞女の節を失ひたる者を娶るは其人亦是れ已でに節を失へるにて候はん。然るに玆に貧窮身を托する所なき孀婦御座候之は再嫁致候とも宜しかるべく候か、先生復た髯のヨリを反へして答へて曰く是は後世饑え凍えて死するとを怕るゝが故に是の説あるのみ然し餓て死するは事極めて小、節を失ふは事極めて大、中々左樣の事は君子の爲さゞるものにて候（二程全書）

吾人此の話を讀み孔教の人は扨ても〳〵物堅きと哉よし左らば其の夫にて座はせる方は何如ある覺悟をか持ち玉ふにやと不審し之を隣家の論孟先生に承ハれば先生髯を撫づるの暇まも無く恭しく古筐の中より小學明倫を取り出し三拜して讀み聞かせらるゝは

婦に七去あり、父母に順はざれば去り、子無ければ去り、淫あれば去り、妬なれば去り、惡疾あれば去り、多言あれば去り、竊盜すれば去る。

之は異に用心堅固の御事かな好し然らば之を去り玉ひし後ち其の夫にて座はす方は何如にか爲し玉ふ、而して去られたる細君は其殘生を亦何如に爲し玉ふものにや、前說を承はつて考へ合はすれば去られたる細君もとより一生獨身にて節を御守りあるべく夫も亦操を守つて獨身にて暮らし玉ふべきあらん歟、論孟先生殊の外笑つて左樣の不都合なる事が孔子樣の敎に之れ有るものかは妻は貞女兩夫に見へずと云つて無論二人の夫に仕ふるものでは無ひ夫は一日も妻なくして嗣を絕つべきにあらざれば妻を送り出だしたる車を以て直ちに後の細君を迎ふ是れ禮に適へるとなり唐の李勣曰く男子三斗の妻を收むるの力あれば婦をかへんとを思ふは人情の常ありと我國の諺に云く妻と疊と空氣とは新鮮なるを好しとすと况んや彼の七去の道に合はざるものをや去つて去つて新らしきを迎ふ君子人の爲すべきと也と。

嗚呼天下抑も如此き不都合の釣合あるかお石は提燈と釣鐘とを以て不權衡の甚しきものとし日本の經濟學者は輸出入の差

を以て慷慨流涕すべき不平均となせり然れども吾人の眼中より見れば宇宙間如此く無理非道慘酷亂暴なる振り合はせはあらじと思はるゝ男子よ汝は妻を手打にするの權あり家風に合はざるの妻は即刻にも追出すべし利口に辨じ妬心めきたる婦は道に隨つて直ちに去るべし而して當日新なる細君を迎ふるは其當に爲すべきの義務あり、婦人よ汝は三從の義あつて專一の道なし夫の言葉は無理と思ひて從ふべし去らるゝ時は三行半を持參するを忘るな家に大歸ては一生復た嫁すべからず貞女は二人の夫に見へず必らず〲節を守つて操を破るべからず、と彼に向つては蜜、此に向つては毒、嗚呼人生れて婦人と爲る勿れ一生の苦樂他人の手にあり慷歎の至りと云ふべきものなり。

但し吾人は彼が男子に氣儘を許しながら女子に勝手を許さゞるを歎ずるにはあらず苟くも勝手氣儘と稱ふべきものならんには男子に之を許したるは男子の爲に歎ずべく女子に之を禁じたるは寧ろ其の道の爲めに慶賀すべきものあり故に婦人一度び嫁して再びせざるの義も正理に合へりとせば假令ひ偏屈なる漢學者が手によつて之を制したるものとするも吾人は今ま謹んで女學の爲に之を感謝すべし然れども婦人兩夫に見ゆべからずとの一義は吾人毫末も之に理由の存ずるを認むる能はざるが故に數百年來此の一大鐵鎖を以て幾億万の同胞姉妹を束縛したるとを慨歎せずんばあらず。

然れども史記に明言したる忠臣二君に仕へず貞女二夫を更へずと言へるは其意味果して何如なりや、抑も人は二人の主人に兼ね仕うると能はざるが故に一時に二君に仕ふるは無論其職に忠なるものにあらじ、如此く一婦人の一身を以て同時に二人の男子に副ふは惡しく徒らに一人の夫を棄てゝ他に更ふるは亦固より道に合はざることなり。故に貞女不更二夫の一句も如此く解釋して差支へなしと云はゞ則ち之れ固より當然至極の道徳敎として感服すべきものなりと雖ども憾むらくは數百年來の解釋全く之と反對し凡そ女子は何如なる事情あるに關はらず一生間二人の男子に見ゆるとを許さずと爲し之が爲に實際非常の弊害を釀し來たりたるものなるが故に今ま死灰にマッチを附し改めて其解釋法を別にするに及ばず凡よそ此くの如く惡しき果を結ばせたるものは亦之を惡樹として全く斷切するを至當となす。

左らば男子妻を去つて復た新らしきを迎ふるは宜しき乎、又問ふ妻夫に去られて出て更に他家に嫁するは宜しき乎、吾人

は之に特別の事情あらざる限り其共に不可なることを信ずるもの也。抑も婚姻は人生の大事にして國家盛衰の由つて岐るゝ所あれば上が上にも之を嚴そかにして其契約を確かにせざるべからず、蓋し夫婦は男女二つのもの相合つて一躰となり苦樂生死を分つて一生の道行を共にすべきものあり故に其交はりの彌よ固からんを欲するものは之を合するに當に亦その彌よ強きを希はざるべからず譬へば物の離れざらんことを欲する時は宜しく之を組合はせて釘打にすべく糊附接合はせの得て能く爲し得べきにあらざるが如し、然れば夫婦間の漆の如く膠の如くあらんことを欲するときは之を合するの當初亦た確たる相應の契約なかるべからず之を德義上及び法律上の兩點に於て婚姻に必要する最大緊要の事となす也、然るに彼の孔孟の敎及び凡べての尊男卑女を專一とする道德敎に於ては未だ曾て夫婦の間だに相當の契約あるものあるを許さず否な契約に似たるものの固より之れ有りと雖も其實未だ之を契約と云ふ可からず寧ろ夫が其妻に對するの權利妻が夫に對する可憐なる義務責任と稱するの外なきものなり。故に吾人が今ま我國の新夫婦に希望する所のものは斯る一方に命令の權ありて他に單一なる屈從の務めあるが如き不都合至極のものにあらず甘く權利と義務とを切半して雙方に同樣の責任を負はせ彼此ともに相侵さゞるの契約を爲すべきものを云ふのみ故に夫婦は其相ひ合して一躰となるの日當に約して云ふべし、

吾等今日相約して一躰と爲る之より以往相助け相救ひ患難喜樂を共にすること猶ほ一身の如くならん

と而して後ち夫若し慘酷無情なるか、妻若し其妻たるの操なきか、夫若し姦淫を侵すか、妻もし其德を破るか、此等の事雙方ともに最初の契約を破ぶるものなり此の破る所の人は既に夫たり妻たるの資格を失へるものなるが故に他の之に向つて離婚を請求し得べきは固より論なし、而して之を請求するは夫が妻に向つて之を要し得るが如く妻も亦た其夫に向つて之を要し得べきは亦固より論なきことと云ふべし。然れども如此き公平相對の處置は當今離婚裁判の制未だ備はらざる我國に於て固より亦た未だ望むべからざることなりとは言へ吾々が希望する所果して如此しとせば成るべく亦た如此く處置して行を公平に爲したしと思ふ天下尊男卑女の不德を口にするの君子は希くは速かに此の美風を實行するの覺悟ありたきもの也。

抑も淨瑠璃本中姫君の議論當今の理論に適せず夫婦を二生あ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

りとするの覺悟生物學者の眞甲に打破る所なりとすれば夫婦なるものは實に一生の緣なり云く一生の緣にあらず其の契約の行れ居る間だの緣なり、左らば高尙上乘の夫婦と爲つて老を偕にし穴を同ふし比翼連理全世の道行を共に與にするの好同伴は暫らく言はず、彼の何事かの忌むべき事情に由つて既に其の契約を破り合はせもの乍ち離れて夫婦玆に離別の不幸を見るとあらんか、之よりして夫が新妻を娶るの自由なるが如く妻も亦た二夫に見ゆるの自由あるものなり此の一點より見來るときは再嫁の事敢て毫末の不都合なきものと云ふべし。

然れども吾人は夢にも離別離婚の不吉を聞くとを喜ばざるが故に亦た如此き不吉の事に由つて自由となれる男女が更めて再び娶り再び嫁するの善惡を評するを喜ばず、然れども玆に偕老の契り全く徒らとなりて同行の一人卒然無情の風にさそはれ魂を反すの香空だのめなく立登つて起臥蚊張の廣きを覺ゆるの曉、妻を失ふの郎、郎に別るゝの妻、之より果して何如にかせんと云へるの一事は吾人が惻然として夙に一言の論を爲したく望む所のもの也。

然るに此時に當り孔敎に養はれたる從來の習慣は揚々として云く夫は後妻を迎ふるに構なし妻は一生獨身にして暮らさゞれば即なはち貞を破ぶるものなりと、此故に亡妻の送葬、歸路に新婚の緣談をなすの無情男子ありと雖も後室は茶を立てゝ何々院と號し後家は縫針洗濯を以てやもめを衝き通すべきものと定まれり。世間滔々たる多數の婦人もとより皆な後室後家を以て辛棒するものあらざるが故に此習慣の勢力左程に憂ふべからざるものゝ如く見做すものもあらん歟、然れども苟くも古風の女德を守り女大學の貞操を心得たらんものは大抵皆な此の覺悟を主張し一片の義理として必らず亡夫の後生を弔らんと申張るを常とす、故に其心より之を道として其の如此くならんとを申し張るもの及び心に恐々しと惡びながらも習慣の行掛り名譽を尊ぶの人情として是非なく之を言ひ張るもの、其類固より一樣にあらずと雖ども今に至つて倘ほ寡婦の再嫁を好まざるものあるを見る甚だ多きの實あり之れ大に誤れる者にあらずや。

抑も夫婦不吉の出來事によつて生き乍ら互に別るゝとあらん時も既に其契約を破りたるの故を以て男女各更めて婚するを不可とせずと云はゞ、今ま夫もしくは妻すでに此世を去つて一生の契約全く了するを云ふ此時に當つて遺妻何が故に他へ

適くことを得ざるか天下決して之を制止するの道理あらざる也
基督教の經典聖書に云く
夫生ける間は妻法に繫がる丶なり然れど夫もし死なば心の儘に嫁する事を許さる（哥林多前書第七章）
と此故に離婚を禁ずるの嚴なると彼が如く、離婚後暴りに再婚することを制する彼が如き、彼の西洋文明の國々に於ても既に其夫もしくは妻の死去したる後は再婚を許すと極めて自由にして人々毫も之を意に介せざるものなり思ふに之れ眞に道理に合へるの處置たるが故に吾人は一日も早く窮屈不道理なる習慣を打破して寡婦の再嫁を自由にする如此あらんことを希望する也。

此故に吾人は謹んで敬愛する本邦の寡婦諸君に告ぐ、世界に於て當今尤も公平にして且つ尤も自由の隆盛なるは米の合衆國あり而して此の合衆國に公平と自由との精神を吹込たるは該國の建設者ゼウジワシントンと云へる人ならん然るにワシントンの功績は半ば其令閨の補助に由れりと承はり及ぶ、夫人の賢德人の普く知る所ならん而して此夫人は最初將官カスチスに嫁ぎ夫死して後ちワシントンに再嫁したる者にあらずや、又た哲學者として万國に芳名を轟ろかし深奧ある其志想は東洋万里の我日本國に渡來して尙ほ夥多の勢力を有するシヨンスチウアートミル氏は其有名なる凡ての著作は何れも半ば夫人の助力に由て成りと明言し婦人死するの後追悼措かず遂に自由の理を著はして之を其の靈前に捧ぐるに至れりと傳せり而してミル氏をして獨立の思想を練らせ女權の伸張に盡力せしめ優温なる愛情を發達せしめたる當夫人は最初テーロル氏の愛妻にして同氏逝くの後ち則はちミル氏に再嫁したるものにあらずや、吾人は女流小說家第一位の人物として常にゼヲヂイリヲットを敬す思ふに其の人情の隱微を穿ち女性の習慣を摘發するに至りては寧ろシエークスピアに優つて劣る所なかるべきか然るに女史は最初レエス氏に嫁し同氏死するの後ちクロッス氏に再嫁したるものにあらずや、此他ローマの義士ブルータスの賢妻ポルシアは嘗つてビブラスに嫁して一子を擧げたるの寡婦なりき、ナポレヲンボナパート皇帝の后カゼリンは嘗てビウハルアイス子爵に嫁し子卒するの後帝に嫁たるものと聞ゆ、而して此等の諸夫人は何れも賢良淑雅の方々にして女德殊に高かりし由に承はり爾來世人は嘖々として其の美質を賞賛して措かざるを見れば寡婦再縁の事決して愧づべきにあらざるを知るべし。故に諸君若し別に意あつて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寡居の樂しみに安んぜらるゝか然らバ吾人は固より諸君を強ゆるの務めなきものと雖ども、或は若し大に爲すあるの德を備へ之を以て他の男子を補助せバ世を利すると尠かるまじく思はるゝ所の賢夫人にして徒らに舊來の習慣に縛せられ敢て情を制し思を屈して心なく寡婦の境涯に一身を沒せらるゝとあらんを恐る、如此きは啻に其姉妹一個の不幸にあらずして實に國家惣躰の上に於て尠からざるの不利益あるが故に彼の不道理なる制御を徹し去らんとは吾人が尤も切望して止まざる所のもの也。

● 論說

○金屋の秘訣

木村熊二

連日の時雨瀟〻として窓にうつろふ七草の畵くか如き秋の色もいつしか野分に打萎れていとゝあはれに見えにけり芭蕉を敲く雨の音のみ柴の扉ハおとつる人たになかりけれハ言葉かたきとして半日のつれ〴〵を慰むるよすかもなしふと意に憶ひ出る事あれハ氣の毒なから半睡の夢に一塲の香甜を嘗て一日の勞働を忘れたる車夫を呼ひ起し腕車に乘りて駿河町なる三越の店を訪らへり是は近頃巴理の新樣を我か國に移さんとて浩蕩たる海波を航して同店に來寓せられたる婦人洋服裁縫に熟達の名聞あるハフマン夫人に面會せんと欲すれハなり余ハあなかち巴理の新樣如何を探索する爲ならす彼の時樣の淵源に住馴し婦人なれハ裝飾の事には考究する事もあらん其を聞たらんには何程か美術上に裨益なからすやと思へれハなりされと彼の夫人の語らるゝハ尋常一般の事のみにして他に新想奇說あるにあらす我か國の婦人は其の姿容に從ひて裝飾せしめ多少の折衷を爲して可ならんと余は其の言の空しからすして同感あるとを喜ひたり今や我か縉紳家の夫人令孃より學校に通學する女生徒に至るまて洋服を着し洋粧を試むる事に熱心なるはほとんと人をして愕然せしむるものあり夫人令孃の會遇したまふや必す先つ巴理の新樣英米の粧飾に意を注きて菅の根の春の日にも晩餐に時を移し山鳥の尾の秋の夜にも寢よとの鐘を數へたまはて其の是非巧拙を評し給ふとかや又中等以下の婦人にして昨日まて細腰に着きて劇塲の御供せし南京繻子の帶をもあはれ今日は洋服を飾るの積と爲したまふとかやされと其の結果は姿容に一段の美を添る所あるを覺えすして却て噴飯に堪さる事多かるハ果して何んぞやかれ美術的の意思に乏ほしく漫に洋服を着して西洋婦人を摸擬し自ら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

皆とするの致す所なり日本の婦人ハ推なへて躰格も少さく起立するにも前部に傾き易く歩を進むる時ハ腰臀を左右に振ふを常とすれハ貴府の長裾を曳かんよりハ寧ろ昌須頓の短裳にして快活なる風姿を學ふこそ宜しからめハフマン夫人の言の如く其容姿を飾るに幾多の折衷を加へて日本の新樣を造成してこそ却て見へき所なりけれ百事巴理の婦人を摸擬する時は東家の女の顰を學ふ嘲笑を來す事もやあらん身に巴理新樣の衣裳を纏ひ蜂腸を學ばんとて呼吸するに苦み頭に高帽を頂きて吹き來る風に飛揚せられん事を懼れ足に花靴を穿ちたれと細きに過たれハ足を傷るを如何にせん馬車に乗りても散歩を試むるにもたゝ何となく窮屈にして輕便なる洋服ハ却て自適を妨くるものとなりにけり殊に頭髮の如きハ其の結び方なその捧腹に堪さるものあり半頭の異髮を切斷してうるさくも之を眉上に垂下し或ハ之を縮めて左右に分ちたれハ梁冀の妻の墮馬髻よりも異樣の結ひ方にて親子連にて故國を出たる角兵衛獅子、欣然として水を出て天下の美を以て盡く已に在りと思ひたる河伯もかくやあらんと思はれたり支那人の豚尾髮を學ひて之を頭後に卷付るも渡邊結ひの多情なるも其の人にして始めて美觀を添るなりけり

其粧飾ハ意匠の花の外貌に出顯るゝものなれハ人〻各其の趣向を異にせり或ハ淡を賞し或ハ濃を愛し或ハ淸を尊ひ或ハ艶を弄ふ東家の女の顰を學ひたる不具津女にあらねハ其の粧飾の胸裏の意匠に適せさるものなからんや試みに見よ雪の膚を玉川の水に洒し解けし嶋田を三ケ月の櫛にて支へ京縮緬の棒縞に繻子に吉野織の帶を結ひたる姿ハ胸臆の淡薄にして幽谷の蘭の如く竹外の梅の如き佳人の最も好む所なり高き嶋田に金糸を結ひ落なんとする雲鬢に香油を薫らし朱唇を染て玉蟲色を爲し遊仙染の被布に小紋縮緬の衣裳をしとやかに着なしたる姿容ハ柳の眉の春いと淺くして尙ほ蕾を含み池の芙蓉の秋深くして其の花未だ流水に誘れさる深閨に生長したる令孃の最も愛したまふ所なるべし一本の銀釵に水淺黃の一粒鹿の子の切を用ひて之を束ねたる達磨返しに藍と鼠の大辨慶の衣裳を纏ひ唐繻子と八反と腹合の帶を結ひ雪の如き白き足を顯して起立したる姿ハ雨を帶たる一枝の李花の如く快活にして婀娜なる婦人の常に欲する所なり斯の如く胸中の意匠自然と外貌に發顯して之を抑壓すへからさるものなり我か國の婦人ハ全く意匠に乏しきにあらす自ら振つて之を發達するの才に乏しきなりされハ美術に基きて固有の意匠を發達せしめ辨利

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

のある所は之を取り其の適せざる所は之を捨て現時の情勢に伴ひて其の天賦の美を磨きなば豈敢て歐米婦人の美麗と壯觀に一歩を讓らんや今や我が國の婦人の衣服と粧飾に浪費する金圓は數万の上に出るといへとも却て外國婦人の嘲を招くものは他なし繁に過ぎ濃に亘り淡泊に失して其の宜きを得ざるによるものなり而して其の源因を尋るに美術に基きて意匠を養成せざるのみならず盡く之を擯斥して擧て以て歐米婦人の嚬咲を學はんとするにあり余故に美術の一斑を示して金屋の佳人に秘訣を與へんと欲するなり　（未完）

○德育に付ての一案（第二）

加藤弘之　演述
松川福三郎　筆記

先刻御話した通り宗敎の道德でなければいけまいと思たけれども其時は思た計りでそれを以て大變効能があるとも考へなんだ併しながらどうも今の有樣では先刻から御話する通り德育の主義がシッカリ定まらずして効能が少いそれで德育智育躰育の中で智育躰育は整ッてきますが德育は唯善事のありました話を聽いた位で何にも役に立たないところで日本の有樣はそう云ふ譯である處が今外國の有樣を調べれば歐羅巴には耶蘇敎と云ふものが一般に在て耶蘇敎が道德の大本になッて居るそれから又土耳其の樣な回々敎を奉ずる者では回々敎が道德の土臺を爲して居る支那は宗敎と云ふのではありませんが孔孟が道德の大土臺になッて居るこう云樣に耶蘇敎、回々敎或は孔孟主義と色々調て見時は良いものもあり惡いものもあり得失利害がありますけれども併しながらこういふ大土臺のある國では其土臺が能くても惡くても動かせるものでないシッカリ根の張切たものである其耶蘇敎が大土臺になッて居るのは惡いと思ても變ることが出來ないそれ程シッカリしたものだそれから土耳其の回々敎でも根のはへたしッかりしたもので惡いと云ても少も動かすとは出來ない支那の孔孟主義もそうだ誰がなんと思ても動かすとは出來ないそれ程根の强ものが道德の大土臺に建て居るのでありますが外の國々は皆そういふ有樣である然る處が日本ばかりは丸で有樣が違て先刻から御話する通に御維新前迄は孔孟主義或は佛敎があッて上等社會の道德の元とに多少あッて居りましたけれども其後の有樣は何もないから政府でも人民でも日本の德育と云ものはどうしたら宜かろう孔孟主義が宜かろうか耶蘇が宜かろうか西洋の道德哲學に因が宜かろうかなどゝ無駄な評議ばかりあッて困ッたとは何も出來ない有樣になッて居るそう云國の一般の道

徳の大本ハ何にしたら宜かろうといふとを評議する國ハ日本より外ハ何處にもありやあしまい良くても悪くても土臺の据つた徳育が他所の國に在るが日本にはそれが壊れてきて丸て人の考へ次第學者や教育家や役人が何が宜かろう之れが宜かろうと小田原評議をして居る外のとハ知れませんが道徳ハ日本ほど困た國ハないと思ふ今の日本の有様で一般の道徳をどういふ主義にしたら宜かろうそれが宜かろう之れが宜かろうといふとを西洋人が聞いたら膽をつぶして居るだろうそんなとは何處にもない日本ばかり道徳の主義が定まらぬのハ他所の國の人が餘程不思議に思ふだろうと思ハれます道徳の主義をどうしたら宜かろうといふのハそれを言ひ換へて見れバ國民の一般の氣風だの思想だのを學者、教育家が寄てどうしたら宜かろう日本人の氣風ハどうしたら宜かろうと云て學者や教育家や役人が寄て評議して居ると同じであると思ふ國の氣風や思想ハ學者や教育家や役人が寄て出來るものでないそれの原因となつて出くるものハ色〻あッて數へ切ぬほどある原素のものハ澤山あるけれども其中重もなるものハ徳育であろう子供の中から薫陶される徳育に因て其國の人の思想や氣風が出來てくる其の徳育は何から出てくるかと大元を調べて見ると外國でハ重もに宗教に因て出てくる宗教に因て其國の人の氣風や思想が生れて出てくるのハ何所の國でも當然な譯でそれだから今日の日本の有様で道徳の主義が定まらずどうしたら宜かろうこうしたら宜かろうと云て學者教育家役人が評議して居るのは日本の人民の氣風や思想をどうしたら宜かろうと評議して居るのと同じである氣風や思想が評議していけるものでない日本ハそういふになつて居るそれだから餘程奇妙なものになる唯學者教育家役人が骨を折て少しづゝ助けて行くとハ出來ませうけれども原素になつてそれを生出して行くとハ何處の學者でも教育家でも出來るものでない學者や教育家で國の氣風が生れる譯ハない處が日本の有様でハ學者や教育家がそれを生み出さなければならぬとになつて居る處が日本ハ世界一般に通する道理に外れるといふ道理ハない果して日本が外れて出てくる道理がない以上ハ學者や教育家や役人が徳育の主義を評議して定めるとした處が迚も仕方がなかろうと思ハれる併しながら今の有様でハどうかして定めなければならぬ今の有様でハ徳育ハ何も出來ないそうして見れば中學校小學校の子供の徳育が出來れバ日本人民の徳育が出來るのであるからどうか役に立たない徳育になるより外かに仕

方がない今日の處でどうか考へを付て德育の効益を顯はして役に立て行く樣にせねばならぬ道理であろうと考へられる。

私の考へでハ先きも御話した通り私が五、六年前から小學校中學校の德育ハ宗敎に因らなければならぬ宗敎を離れた德育は役に立たぬと考へて居りましたが今日に至て益〻迫ッてきましたから今日から中學小學の德育は宗敎に依たものにしなければならぬといふ考へが益〻深くなッてきました迚も學者や敎育家や役人が寄ッて道德哲學から引出してきたり或は支那主義や西洋主義をゴタマゼにして編輯して修身の敎課書に充るとはとても仕方がない話だ是れからは斷然と諦めて宗敎に依て小學中學の德育を立てねばならぬそれで德育といふものは智識を開くものでもない智識に因て出し得べきものでもない重もに感情即ち英語の「フイリング」に因て出來るから德育の方では極く有り難いとか極く恐ろしいとかいふ樣な餘ほど不思議なところの本尊樣がなければならぬ神樣とか佛樣とか上帝とかそういふ樣な本尊樣は誠に有り難いものである誠に恐ろしいものであるといふそういふものが一つ本とに立て極く有り難い極く恐ろしい處に因て敎へが行屆いて行くものでありますそういふものが立て居るから敎へが行屆いて人心に感ずるとがよほど强いそれだから迚も中學小學などに道德の哲學などを引出してきて德育の道理などを說いて敎へた處が役に立つものでない道理から出てきた道德主義では何も役に立つものでない哲學の道德は智慧を開くもので決して一般の道德を開く役に立つものでない一般の道德は感情に因て出來るものだから本尊樣は極く有り難いものとか極く恐ろしいものとか極く不思議の土臺になるものがなければならぬ。

そういふ私の考へでそれより外に小學中學の德育の出來るものではない併しながらそういふ譯に云ひますと或は不思議に思ふ人がありませうそういふとを御前がいふのは平生の議論と丸で違ッて居る平生は理學哲學を褒めて居るに今日は哲學を大變惡く云て宗敎の肩を以て論するは餘ほどおかしいどういふ譯だと不思議に思はれる方もありませうけれども私は今日でも宗敎は嫌ひでヤッパリ理學哲學が好きで宗敎は何の宗敎でも皆嫌である其嫌ひといふは私が理學や哲學の道理から考へて嫌ひなので宗敎は理學や哲學の道理から考へて見て分らぬ理窟が多い誠に取るに足らぬそれだから私はヤッパリ今日でも嫌ひであッて此頃宗敎が好きになッたのではない今日も理學哲學が好きで宗敎が嫌ひ嫌ひだけれどもそれは學問

上から云て嫌ひなので今日の世界を治めて行くには宗教でなければならぬから其道理から云ては嫌ひといふ譯にはいかぬ今日の世界は學問上を以て行くとは出來ない今日の人を皆理學者、哲學者にするとは出來ない皆理學者、哲學者に化するとが出來なければ學問上から見て悪い宗教でも道具に使はなければならぬ（未完）

○酒の害（其二）

津田仙　演述　　佃龍雄　筆記

凡そ動物が食物を擇びますには舌で味ひ臭を感じて躰に適當した即ち旨いものを擇びます然しながら人間に於ては其本性を昏まして居る者が往々ある今一二の證據を擧げて見ませう先づ人間の舌の搆造は如何にと云ふに舌の先きはこれは人間の食となるかならぬかを判し眞中は食物を樂しむ所食慾の進む所です一番元の方は若し毒であれば衝戻すと云ふ性質を持て居ります然し舌は一面に濕ふて居るから此の試驗は中々出來難き樣なれども乾きたる布を以て之を拭ひゴムのポンプ即ち齒醫者が療治する時用ゐる器械を以て舌を風にて乾して試驗すれば舌には如何なる神經が有るか能く分ります其先きへ酒を灑ぎますれば甚だ不快を感じ舌の中央は愉快を覺へまするもので御座います人は酒飲むに大抵舌の先きを下あごの内に巻きて盃を舌の奥に持つて行き舌の先きに觸らん樣にして飲むと言ひました是れ即ち本性を失つて居るのではありませんか(喝采)斗酒を呑み又五郎八茶碗で引懸けるのを御覧なさい樂のしく且つ快氣に飲むであらうと思ふに皆顔を蹙めて飲むではありませんか(大喝采)

之れに因て考ふれば盃によりて旨く飲めると否とが有る理由も解りましよう猪口の出來自然舌の奥へ達する樣な物は飲酒家の最も喜ぶ所ですが是等は實に自ら欺くと云ふもので譬へて申うさうならば請願書を受付けに出すと受付けは眞の本性を有して居るから嚴に受け取りません故に受付けには知らさず眞中の役人に出すと是れは食慾ですから至極面白い聞届けて遣るが宜しいと云ふ奥なる上官は直接に害のあるもので無いから暫く受納するが宜しい直接に害があらば衝戻するべけれど直接で無いから遂に飲み込みます(大喝采)

學理上のお話しは此位に止めまして實地の事に移りましよう英吉利や亞米利加では生命保險會社と云ふが立て居ります近來日本にも明治保險會社など、申す者が出來ましたが固と生命の保險で御座りますから酒飲みの害などは餘程能く調ら

べて居ります又政府の義務でも有りますから十分綿密の統計表が拵らへて有ります其生命保險會社の規則や統計を見ますと先づ二十歳にあるまでハ餘り酒を飮みませんから廿歳になつた所で酒を飮む者は何年程生きるかと云ふに其後十五年程生きます故に上戸の壽命ハ三十五歳です又酒を飮まぬものは廿歳の彼四十二年程生きます故に下戸の壽命は六拾貳歳です(喝采)して見れバ下戸は上戸に比して二十七年の長壽と申さねばありません然し酒を飮まんで廿一歳で死するものも酒を飮んで八十歳に至るものも中には必ずありましようが多くの人を統計して何分何厘を明らかにしたる以上は決して毫髮の差も無きもので御坐ります

然るに或る人は成る程澤山に酒を飮んだならば隨分不健康でもあらうが少しづゝならば差間へは有るまい孔子は唯酒無量不及亂と申されたでは無いか少しならば養生にも爲るならんと問はれます是れには能き引例がある千八百三十九年より千八百四十年まで英國の陸軍でコロナル、サイキと云ふ人が兵隊を引連れて印度に居りましたが其れを三分し千人づゝとなし一隊には職務上に差支へを生せざる以上は勝手に酒を飮むことを許し次ぎには程克く飮むなら宜ろしいと許し終りの隊にはお前方は決して酒を飮むとあらんと禁じました然るに第一の隊は千人に就いて四十六人沒し次隊の程克く飮めと命せしものは二十三人悉く禁じたる最後の一隊は纔か十一名のみありしと書ております今一つの例は同じく千八百四十九年に於て五百人に就いて試驗したことが御坐ります前の如く矢張三と爲せしに第一の酒を許されたる者は二十二人死し少しく許されたるものは十一人禁じられたるものは五人の死亡ありしと申します今前後の二例を對照して見ますると實に能く合つて居ます

或人は又申しますそれは熱國の故であらう若し寒地に於いて試驗したあらば必ず酒飮みの方が勝であらうと然るに此れにも好き證據があります北極地方を測量する爲に趣かれた某氏は多くの人を連れて益〻北地に行くので凍へて死ぬものがある其死ぬ順序は酒を多く飮む者は先きに死に下戸の者は次に死し丸で飮まぬ者は最後まで殘つたと申します

それで酒より起りたる病氣は先づ如何なるものかと云ふに肺病勞症僂麻質中風心臟病顚癇此等ハ重に酒より起るとが多く御座ります特に癲狂院に入者の四分の一は全く直接に酒の害より發狂した者であると云ます又酒を飮みまする者の子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

孫の愚になりしとは往々御坐ります爰に米國に一對の夫婦が有つて六人の子供を生みました其内の二人は夫婦とも酒を飲まぬ時に出來たのですが其後夫婦とも酒を飲む樣になつてから生れた四人の中一人の息男は虛弱にして餘の三人は愚蒙なりしとの事です實に酒の子孫を愚にするは甚だ著るしき事ですが取り分け婦人の酒飲みに愚子を擧ぐる事が多い樣です先づ十ヶ月は胎の中に養ひ生れてから十ヶ月ばかりは乳を以て育てます酒を飲母の胎に在り或は酒臭き乳を飲まば其子は愚蒙虛弱となるまいと思ふてもかないません左れば乳母が酒飲みでも其子に害の及ぶことは言はずして明らかなることであらうと存じます

倘ほ玆に西洋にて有名なる詩人等の身の上を比較して酒の心を鈍くする證據を擧げましよう英吉利に有名なる詩人が三名居り其名はバイロン、ポープ、ボルンと申しました其人々は皆な酒を飲むと李白の如くでありましたが何れも三十八歲を越しませんで沒なりました又亞米利加にも有名の詩人が居りました其名をホイチヨル、ロングヘルロー、ブライアント抔と云いましたが此等の人は一切酒を飲みません所がホイチヨル、は八十歲で矍鑠として存しロングヘルローは七十五歲に至りブライアントは八十四歲で死んだと申すことです然るに飲酒家の詩は壯年の頃は實に佳麗で御座りましたが晚年に至りて拙なくなつたとの事です一方の酒を飲ん人の詩は老て益す巧妙の域に達し實に美しき詩が出來たと云ますが實に酒の精神を鈍くし又身躰を害するとは驚くべき程の事で御座ります且つ酒は人を不信仰にします品行を亂すに至ります淫奔の媒となります(ヒヤ〳〵)醜行能く酒を導びき酒亦淫を誘ひ淫酒互に相たすけて人間の毒害を爲とは實に畏るべきことであります(喝采)或は酩酊して直接巡查の御厄介となる者もあり如之酒は能放蕩を誘ひ徒づらに金錢を費し遂に貧困に陷いれ遂に盜心を起し詐僞を行ひ竊盜をなし終身を誤まる者も甚だ多くあります(喝采)此等の事は只今爰にお集りの諸君には少しも關係の無いことで御座りますが(ヒヤ〳〵)矯風會に於ては大に關係のあることです此等の人が有から矯風會を立て之を救助せんとせらるゝので其規則の中には藝娼妓を廢すると云ふこともあるが藝娼妓酒を導き酒亦藝娼妓を誘ふに相違御座りません英國人が甞てカナダ地方のオンタリオ、エペックの二州を巡回しました所三年間に三萬八千二百八十九人の罪人を生じましたが内二萬一千二百三十六人は酒の爲に牢に這入たもので

御座ります又英國の一學士の說に若し英國をして全く酒を廢するとが出來たらば英國獄舍の九分通りは空虛となるであらふとおります(喝采)　(未完)

● 叢話

○和文學講義

第九回　詞辭用格　鈴木弘恭

是れも上の四段用格の續きあるが。今回は佐行太行波行麻行良行の運用のことをいふべし。但し此のうち佐行は詞も汎く。又變格もあり敬語もありて。紛れやすければ。よく注意すべし。その變格と敬語とのことは別に之をいふべし。又良行も紛れ易き詞にて。四段と下二段と同じ意に運用すれども。是はいづれに運用しても意はかはらねば指問はなけれども。能く注意して四段と下二段との區別を知るべし。

さて佐行はさしすすせ。太行はたちつつて。波行ははひふふへ。麻行はまみむむめ。良行はらりるるれと活動ことは上にいへるが如くあり。又將然連用終止連躰已然の五言及び希求使令言の名義のことは上に委しくいへるを見合すべし。今はその詞の例とろの俗解とのみを左に示す

佐行四段用格將然言

押さず	俗オサナイ	押さむ	俗オサウ
押さなむ	俗オシタガヨイ	押さば	俗オサウナラ
落さず	俗オトサナイ	落さむ	俗オトサウ
落さなむ	俗オトシタガヨイ	落さば	俗オトサウナラ
貸さず	俗カサナイ	貸さむ	俗カサウ
貸さなむ	俗カシタガヨイ	貸さば	俗カサウナラ
挿さず	俗ササナイ	挿さむ	俗ササウ
挿さなむ	俗サシタガヨイ	挿さば	俗ササウナラ
示さず	俗シメサナイ	示さむ	俗シメサウ
示さなむ	俗シメシタガヨイ	示さば	俗シメサウナラ
成さず	俗ナサナイ	成さむ	俗ナサウ
成さなむ	俗ナシタガヨイ	成さば	俗ナサウナラ
伏さず	俗フサナイ	伏さむ	俗フサウ
伏さなむ	俗フシタガヨイ	伏さば	俗フサウナラ
乾さず	俗ホサナイ	乾さむ	俗ホサウ
乾さなむ	俗ホシタガヨイ	乾さば	俗ホサウナラ
増さず	俗マサナイ	増さむ	俗マサウ
増さなむ	俗マシタガヨイ	増さば	俗マサウナラ
召さず	俗メサナイ	召さむ	俗メサウ
召さなむ	俗メシタガヨイ	召さば	俗メサウナラ

太行四段用格將然言

打たず	俗ウタナイ	打たむ	俗ウタウ
打たなむ	俗ウチタガヨイ	打たば	俗ウタウナラ
穿たず	俗ウガタナイ	穿たむ	俗ウガタウ
穿たなむ	俗ウガチタガヨイ	穿たば	俗ウガタウナラ
勝たず	俗カタナイ	勝たむ	俗カタウ
勝たなむ	俗カチタガヨイ	勝たば	俗カタウナラ
立たず	俗タタナイ	立たむ	俗タタウ
立たなむ	俗タチタガヨイ	立たば	俗タタウナラ
断たず	俗タタナイ	断たむ	俗タタウ
断たなむ	俗タチタガヨイ	断たば	俗タタウナラ
放たず	俗ハナタナイ	放たむ	俗ハナタウ
放たなむ	俗ハナチタガヨイ	放たば	俗ハナタウナラ
待たず	俗マタナイ	待たむ	俗マタウ
待たなむ	俗マチタガヨイ	待たば	俗マタウナラ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

満たず	俗ミタナイ	満たむ	俗ミタウ
満たなむ	俗ミチタガヨイ	満たば	俗ミタウナラ
持たず	俗モタナイ	持たむ	俗モタウ
持たなむ	俗モチタガヨイ	持たば	俗モタウナラ

波行四段用格將然言

逢へず	俗アハナイ	逢へむ	俗アハウ
逢へなむ	俗アヒタガヨイ	逢へむ	俗アハウナラ
云へず	俗イハナイ	云へむ	俗イハウ
云へなむ	俗イヒタガヨイ	云へむ	俗イハウナラ
追へず	俗オハナイ	追へむ	俗オハウ
追へなむ	俗オヒタガヨイ	追へむ	俗オハウナラ
思へず	俗オモハナイ	思へむ	俗オモハウ
思へなむ	俗オモヒタガヨイ	思へむ	俗オモハウナラ
買へず	俗カハナイ	買へむ	俗カハウ
買へなむ	俗カヒタガヨイ	買へむ	俗カハウナラ
添へず	俗ソハナイ	添へむ	俗ソハウ
添へなむ	俗ソヒタガヨイ	添へむ	俗ソハウナラ
問へず	俗トハナイ	問へむ	俗トハウ
問へなむ	俗トヒタガヨイ	問へむ	俗トハウナラ
縫へず	俗ヌハナイ	縫へむ	俗ヌハウ
縫へなむ	俗ヌヒタガヨイ	縫へば	俗ヌハウナラ
呼ヘず	俗ヨバナイ	呼むむ	俗ヨバウ
呼むなむ	俗ヨビタガヨイ	呼へむ	俗ヨバウナラ
酔へず	俗ヱハナイ	酔ヘむ	俗ヱハウ
酔へなむ	俗ヱヒタガヨイ	酔へむ	俗ヱハウナラ

末行四段用格將然言

編まず	俗アマナイ	編まむ	俗アマウ
編まなむ	俗アミタガヨイ	編まむ	俗アマウナラ
忌まず	俗イマナイ	忌まむ	俗イマウ
忌まなむ	俗イミタガヨイ	忌まむ	俗イマウナラ
倦まず	俗ウマナイ	倦まむ	俗ウマウ
倦まなむ	俗ウミタガヨイ	倦まむ	俗ウマウナラ
好まず	俗コノマナイ	好まむ	俗コノマウ
好まなむ	俗コノミタガヨイ	好まむ	俗コノマウナラ
住まず	俗スマナイ	住まむ	俗スマウ
住まなむ	俗スミタガヨイ	住まむ	俗スマウナラ
進まず	俗スヽマナイ	進まむ	俗スヽマウ
進まなむ	俗スヽミタガヨイ	進まむ	俗スヽマウナラ
摘まず	俗ツマナイ	摘まむ	俗ツマウ
摘まなむ	俗ツミタガヨイ	摘まむ	俗ツマウナラ
飲まず	俗ノマナイ	飲まむ	俗ノマウ
飲まなむ	俗ノミタガヨイ	飲まむ	俗ノマウナラ
止まず	俗ヤマナイ	止まむ	俗ヤマウ
止まなむ	俗ヤミタガヨイ	止まば	俗ヤマウナラ
讀まず	俗ヨムナイ	讀まむ	俗ヨマウ
讀まなむ	俗ヨミタガヨイ	讀まば	俗ヨマウナラ

良行四段用格將然言

入らず	俗イラナイ	入らむ	俗イラウ
入らなむ	俗イリタガヨイ	入らば	俗イラウナラ
織らず	俗オラナイ	織らむ	俗オラウ
織らなむ	俗オリタガヨイ	織らば	俗オラウナラ
送らず	俗オクラナイ	送らむ	俗オクラウ
送らなむ	俗オクリタガヨイ	送らば	俗オクラウナラ
借らず	俗カラナイ	借らむ	俗カラウ
借らなむ	俗カリタガヨイ	借らば	俗カラウナラ
切らず	俗キラナイ	切らむ	俗キラウ
切らなむ	俗キリタガヨイ	切らば	俗キラウナラ
知らず	俗シラナイ	知らむ	俗シラウ
知らなむ	俗シリタガヨイ	知らば	俗シラウナラ
散らず	俗チラナイ	散らむ	俗チラウ
散らなむ	俗チリタガヨイ	散らず	俗チラウナラ
釣らず	俗ツラナイ	釣らむ	俗ツラウ
釣らなむ	俗ツリタガヨイ	釣らば	俗ツラウナラ
作らず	俗ツクラナイ	作らむ	俗ツクラウ
作らなむ	俗ツクリタガヨイ	作らば	俗ツクラウナラ
降らず	俗フラナイ	降らむ	俗フラウ
降らなむ	俗フリタガヨイ	降らば	俗フラウナラ

大方は是等の類なり此中太行の俗言ウチタガヨイウガチタガヨイカチタガヨイタチタガヨイハナチタガヨイマチタガヨイ

モチタガヨイの類のチをツに移してウッタガヨイウガッタガヨイカッタガヨイといふハ俗言の轉語あり此事ハ下の末行の俗言の條にいふべし次に波行の俗言アヒタガヨイイヒタガヨイオヒタガヨイオモヒタガヨイカヒタガヨイツヒクガヨイヌヒタガヨイの類のヒをツに移してアッタガヨイイッタガヨイオモッタガヨイといひ良行の俗言イリタガヨイオリタガヨイオクリタガヨイキリタガヨイシリタガヨイチリタガヨイツリタガヨイツクリタガヨイフリタガヨイの類のリをツに移してイッタガヨイオッタガヨイオクッタガヨイといふ是等のツハ詞を約めていふより起りたるにて此の例普通の俗言に尤も多しなほ云ハゞ髮を結ひてをカミチユッテ匂ひて有るをニホッテアル圍ひて置くをカコッテオク取り込むをトッコム遣りて見るをヤッテミル寄りて居るをヨッテ井ル燃りて食ふをイッテクフあどいふに同じ又末行の俗言アミタガヨイイミタガヨイウミタガヨイコノミタガヨイスミタガヨイスゝミタガヨイツミタガヨイノミタガヨイヤミタガヨイヨミタガヨイの類のミをンに移してアンダガヨイインダガヨイウンダガヨイコノンダガヨイといふハ上の太行の例の如く俗言の轉語の格なりさてンはムと同音にてムの音を鼻にかけていふ時にンとあれども二字ともに通して用ゐ來れり則ちミをムといふも上の太行のチをツといふも第二の音を第三の音に移していふまでにて別に意あし又彼行のアヒタガヨイイヒタガヨイオヒタガヨイオモヒタガヨイの類も俗言ハ第三の音に移してアフタガヨイイフタガヨイオフタガヨイオモフタガヨイとも云へり是も同例あり

拙者の此和文講義ハ後に成立學舍女子部講義録にも記載するを此所にも同じやうに揭るハ煩ハしきやうに見給ふ人もあるべけれど拙者ハ明治女學校頌榮女學等に於ても同樣に之を講じ是を以て語格を知るの捷徑なりと自から信ずるが故に決て贅言とは思ハず重復をも厭ハず此道に志す初學の爲めに一人づゝも是を看る人の多からんとを希ふなり抑も和文の要ハ語格に熟練するにあり世人の和文を難しとするハ語格に暗きが故なり元より假名文字を以て綴るものなればいろは四十八字を諳記たらんにハ誰にても容易に成し得らるゝものにて和文に志あらん者は最初に語格を知るべき事なるに近頃和文を學ぶ者ハ少かに語格中の二三を知るに過ぎざるハ何ぞや蓋し之を教授するもの簡易に說きなして初學に了解し易からしむる法をしらず或ハ玉の緒に云々八衢に云々などいひてとかくに六ヶ敷說きなすが故に初學聽聞くに倦み諳記に苦しみて終に放棄するに至るなるべし拙者ハ此弊を改良せんとして重復をも顧みず此に揭ることとなれば讀者諸君願くハ此の意を諒し給へ

○和書講義　（第三節）

余義に外國人の吾國の書を愛する事をのべしが今其一二を擧るに去る頃京都に滯留せし墺國領事「シエオルーフヒユトーチロキ」氏が或骨董家の店頭に土佐家の描きたる大內裏京都市中並に平淸盛館の圖の古屏風を見附け一々質問したる上金七拾圓にて買取或人に語りて曰く豫てより日本國大內裏の事を噂し居たるに今此の圖の見當りしは幸あれば直に本國へ

廻送し同皇帝に献上する筈なりと(東洋繪畫叢誌)余今茲七月日光に至り徳川將軍内殿の唐木集木戶の彫刻を見るに樹石の向背禽獸の形勢一草一木骨法用筆の妙歷〻見るべし因て此事を神官に語りしに神官曰さもあるべし其原本皆有名の筆なり或西洋人深く是れを嘆賞して直を論ぜす是非購求せん事を乞て止ます神官曰これは吾國無二の品なれば直を以て賣却する事は叶はす交易なれば相談致すへくとの答に西洋人も大に喜び然らば何を以て交易せんといゝしに貴國を以て是にかへんとゐゝければ西洋人嗤て去りしと外國人の吾國の畵を愛する事かくの如し畵は故實に據るか又は事實によるか或は古人の圖に傚か然らざれば誤ちを寫す事多し此佗に畵中變異合レ理、狂怪求レ理の二法は其人の才不才に係る事尤も多し嵩谷一雄賴政鵺を射る圖の額を淺草觀音堂に懸け潜に郡集の中に紛れて人の之を品評するを聞くに一人曰平家物語に猪の早太九刀ぞ抉たりけるとあり此畵は刀を閃めかし高く頭に過く本文に合はざるに似たり嵩谷素より本書を見ずして漫然圖を作りたるを慙悔し直に削り改て畵きしと今存するもの是なり圓山應擧曾て京都智恩院の衝立に(一に額ともおふ)菊に鷄を畵き身を潜めて衆人の評を聞きしに或一人鷄は四季に随て羽毛の變るものなるに菊花の時候と鷄の氣候相違せりと曰ふをきゝて其人の跡を追て聞ければ小鳥商人にて畵の事實に異なる事を悉敷談せしにより直に改めたりと此二つの話しは相似たる事なれども一は故實に暗く一は實際に踈ときによる余先年但馬國森村大聖寺に藏せる應擧の龍虎對幅の龍其眼睛の位置勢の後邊に附けり之を僧に問へども詳かならず今茲日光にて見たる探幽の龍(世に八方睨といふ)其眼睛曩に見たる應擧の點眼に少しも違はず茲に於て應擧の古人に據て苟もせざるを感ず又谷文晁昔時某侯の席上にて富士越の虎を(富士越の龍ハ畵家の多く畵くところ)需められ沈思良久して童子が虎の繪ある紙鳶を飛はす圖を作り遠景に富士を添へければ侯は手を拍て翁の畵才非凡なる事を嘆美せられたりと(東洋繪畫叢誌)是等は所謂異變合理狂怪求理の一端ともいふ可きか

●批評

(51) **西國婦人立志篇** (中本一册百六十二頁定價七十五錢 發兌所東京日本橋區浪花町錦光館)

此書は佳田頼之助氏が米人スタントン氏の婦人の活動を譯述ありたるものにして英佛獨露伊六ケ國に於ける婦女活動の實況を示すに在り而して英國の部に於てはフオーセツト夫人該國婦人社會參政上の勢力を記るしグレー夫人同じく婦人社會教育上の運動を記るしポーチエレツト孃同じく婦人社會職業上の勢力を記るす如く何れも其國々に於ける有力の婦人が其の當時の活動の模様を叙したるなれば精略度を得て讀者を益すると尠からず讀む者若し之に由て西洋婦女子の運動を承

知せば則ち以て大ゐ志を立つるの奬勵となるべし。譯文亦た宜きを得たれども人名の譯語に活字の誤り及び覺則の讀み違ひなど甚だ多く而も卷末正誤の文字なきが故に切角有名婦人の名を記臆せしむるに不都合なるを憾む

（52）婦女のかざし　（中本一册百三十八頁定價五十錢）（發兌所　東京南傳馬町　吉川半七）

此書は加部厳夫氏が公私一般の禮式を記るし殊に女方の心得と爲さんとて特に婦女のかざしと名けられたるもの也 正篇には朝廷に對する禮法及び貴人長官に對する禮法並びに同輩の交際宴會の心得などを敎しへ 雜篇には父母婢僕に對する心得其他普通の交際上に要する雜多の禮儀を敎しへたり元來令義解江家次第又は歐米禮式の如き東西の禮書を折衷し著著一人の考を以て斷定したる箇條等も數多見へたれば此書の意見どほりに世間現今の禮式を引定めんとは中々に爲しがたき者也然れども當今禮法混亂して一定の式なき折なれば此の際彼我古今の宜しき所を採集して一種の新法を製するの必要は言ふまでも無き者なれば著者が遂に此著あるに至れるは實に止を得ざる者也 但だ願くは世間禮儀の志あらん人々が亦各々其考ふる所を公けにゑ相ひ討論して以て正しきに歸着せんとを希ふ。故に吾人は此書に斷定したる禮法の可否に付ては異日女禮改良論を草するの日に於て一言すべし

●佳傳

○サイベリアの女傑　（其二）

此の時より父の宥赦を願はん爲めセント、ピートルスボルグに赴かんとの念日夜に強く十五歳の頃ハ其志既にプラスコベが性質の一部となり父母さへ怪しむ程とはなれり然れどプラスコベハ輕忽にも他言せず又他言するを憚りしかば獨り屋外深樹の下に思を潛め慮を焦がし又恭しく拜伏して先つ第一にハ父が此擧に同意して潔よく許し玉はん事と次にハ此擧の芽出度成就せん事に祈願を凝したる斯くも熟考に熟考を重ね漸く心を決して父に訴へんと思ひ立ちしかバ例の如く神に祈り神の祐助を仰ぎつゝ先つ母に申し上げ母の同意に力を加へて更に父に申し上げんと家に還れバ父ハ敷居に腰打ち掛け煙草燻らせ最と徒然に見へしかバ此れ時好し復も得べきにあらずとて父の前に跪づき其企を申し上げ認可の程を願ひ入れしに父ハ本末を聞き終り靜かに起き立ち抱き上げ内に這入りつ晩餐の供を爲し居たりし妻に向ひて聲高く「母や善ひ話がある………シテそれハ我等の頼よる力であるぞソレこのプラスコベが思を決めて都に上り我か身の宥恕を請はんとハ申し出でたぞ」と言ひつゝ最とも泰然げなる容貌にて娘が言を操り返せバ妻ハ見返へり「エーモーソンナつまらない事を考へたよりイッソ自身の仕事を考へた方が幾等優しであろうよ」これを打ち聽きプラスコベハ痛く嘆げきしかバ流石ハ母の役目にてこれを慰めんと一入和かに「娘茲處へ來なホンニ阿儂ハ善き嬢だね　サア膳を出しやア　暇があつたら都へやりますぞへ」

其後申し上ぐる度々なりしかバ父ハ忍び兼ね嚴しく叱り復たと申し出でざる樣申し聞ける（以下次葉の裏一二〇頁へつゞく）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

〇詩聖ゲーテの母、

獨逸の詩人ゲーテは哲學上の志想に神妙優渥の溫情を調和し詠出づる詞賦に無限の感慨を寄するなんど古今に類ひ稀れなる文學者なるが其の人と爲りと美術上の思想とは全く母にて座はせる方の爲に養成せられたるものと云へり左れば或る人が此の母君に面會したるとき大に驚歎して扨ても〳〵今にして初めてゲーテがよく著名の人と爲りたるの由縁を知れり斯る母を持てる子の名家と爲るは奇しむに足らずと申したるよしなり」元來此母君は性質つねに爽快にして何事をも樂しき方に思ひ運らし絕へて不快憂鬱の暗らきに打沈み玉ふとなどなければゲーテを膝下に置いて物語らるゝにも常に曇りたる樣姿など見受たるとなし其上いつも〳〵面白き談しを聞かせて空氣火地水など云へる無味淡泊の語ばをも尙ほ之に種々の味いを附けて飛動踴躍せしむる如くに思はするの辨にも富まれたればゲーテは幼なき時より其談を喜んで承まわり知らず〳〵万物の景色を觀ずるを樂しみとするの氣風を養ひたり後に至り森羅万象の山川草木此の詩人の眼に寫るときは則ち一種の新らしき景色と爲りて一々に其の詩想をよび起す種と爲りたるなど眞にかゝる敎育の元因ありしゆへと知らるゝとなり

左れば此の高尙なる詩人をして万物の景色を觀せしめ且つ其の景色の後ろに立てる爽快愉樂の天の喜びを見出さしめて以て感慨極りなきの詞賦を世に惠ませしめしは實に此母なる方の力に由れるものと云べし

(接于一一八頁)斯る中にも既に三年を過ごせしが母不圖病に冒されし篤く見へしかバ復と申し出でん由もなく只管好機の至るを待ち切に念願を捧げしが其甲斐や有りけん母の病も日増しに輕み健となるに付け其身が血色日に衰へて細り行くにも拘らず其志愈々確く固く結ひて今ハはや憚りなく時の許さん限にハ飽くまで申し出にける

始の程ハ父母も只幼な心の一筋に思ひ立ちし事ならめと思ひつれバ叱りつ威しつ數〻これを止りぞけしに尚度々も申し出で出づる度毎其熱望の度加わるを見て今ハ輕々しく卻けべうもわらざれバ父ハ涙に無量の情を合せて「モー我等ハ年も老ひ頼み少なき身の上なるに不運にもわるし友達もなく力と思ひ慰と思ふハ只御前一人……其御前が都に行かバドウマー我等ハあるものかへ……それでも尚御前ハ行きますかへと問ハれてプラスコベハ何んと答も荒蕪涙溢るゝ涙に言斷へて心の底ぞ動かざりけり

人の云へるあり「劍をもて責めらる吾或ハこれを忍ばん情をもて責めらる吾遂に忍ぶ能はず」とこれ戰場に一歩を讓らざる豪膽壯士も多く敗を衾裏に取る所以なり況んや濃情の女性柔順の少女にして焉んぞ能くこれを忍ばんやプラスコベハ濃情の女子あり柔順の少女ありしかして今や此の塲合に立てりよしや其志を曲ぐるあるも吾ハ寧ろ今日に續けし其精神を擧めん況はんや尚其志を曲げず其望を挫かざるに於てハ豈にこれを千載の烈女と曰はざるべけんや　(未完)

● 寄書

○文苑

鈴木弘恭大人　撰

初雁

大空にはつかりかねを聞しより秋のあわれぞいやまさりぬる　久野　茂子

同

誰かいそく使なるらんいちはやくはせ田に落る雁のたまつさ　南摩まま子

同

故さとをはつ秋風にわかれきてこゝろもかりかね鳴わたるなり　鄉　幸子

同

初かりハ不忍の池をあとにしていつこへとてかいそぎ行らむ　井上　直子

同

我やとの萩のうハ葉もそめぬまにこゑめづらしき雁の一つら　朝山とよ子

同

秋のよの月の下ゆく初かりハつらもなくねもさだかなりけり　井上瑞枝子

同

秋のよの月もいまはた待ちいづる空にかひあるはつかりのこゑ　岡田　仲子

同

秋きりの空にすかたはみえねども初かりかねぞ鳴てきにける　關瀧かす子

同

はしゐまて月待ほどに初雁のこゑもかすかにきこえけるかな　東條たか子

同

ふる里のたより待るゝをりしもあれ初雁かねそ鳴てきにける　山田ちか子

同

初雁ハいつこをやどゝ定めけん月のまたゆくこゑいそぐなり　大生よし子

里擣衣

呉竹のふしみの里によもすがらねぬ夜の友ところもうつなり　土屋　華子

里擣衣

衣うつおとも遠ちのさとびとのさむさおぼゆる秋のよはかな　土屋久壬子

同

闇からにねられさりけりさとの子が長き夜すから衣うつこゑ　岡井くに子

秋の歌の中に

風の音におどろかされて荻のうへに月すむ夜半の哀をぞ見る　廣瀬すゑ子

かぜわたる軒ばのをぎの音そへて雨にふけゆく夜半の淋しさ

明治女學校の献堂式を祝ひて　豐島忠子

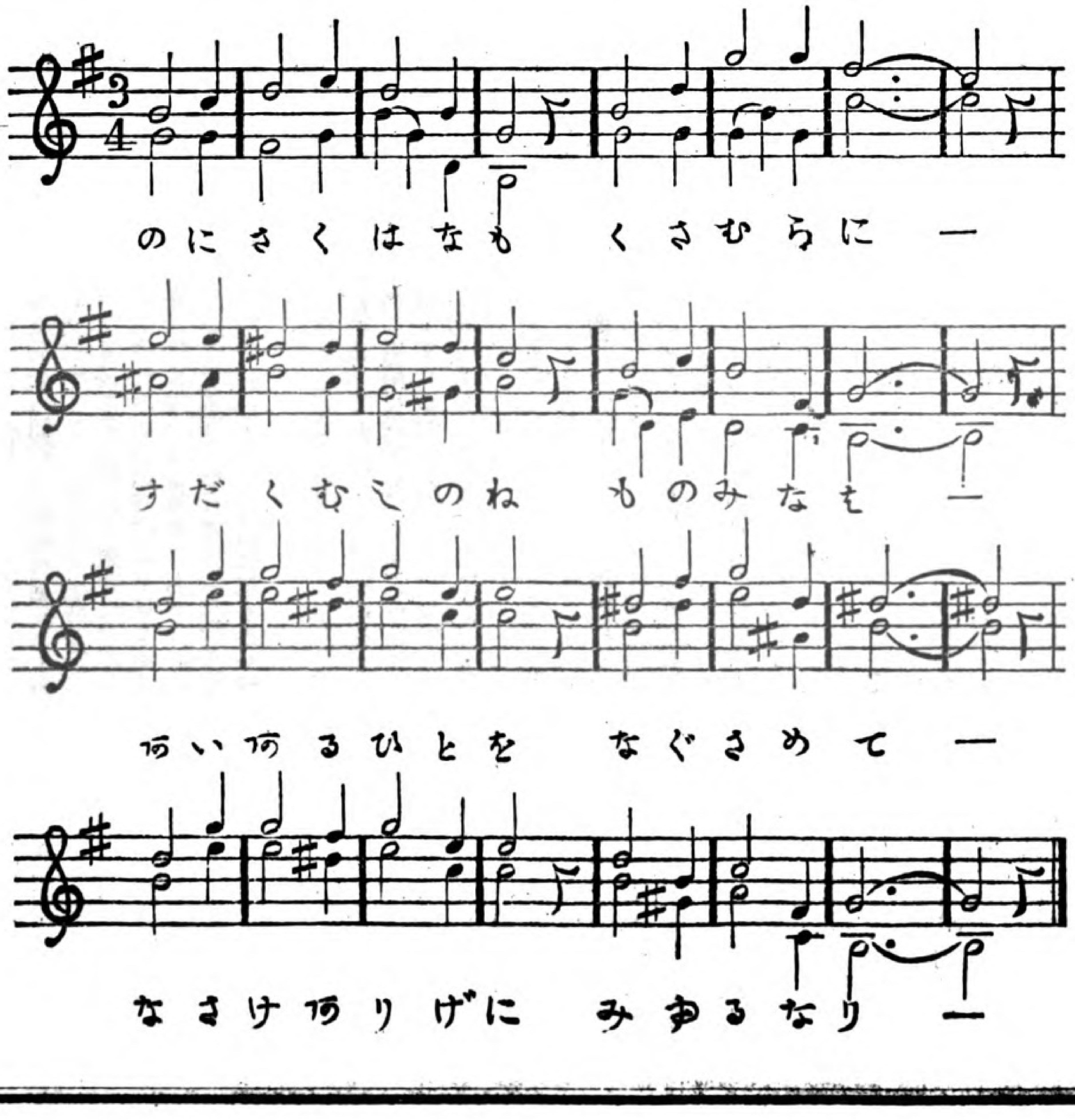
明治二十年の十一月五日ハ。いとよき日なりとて。この學校を此所にうつし。さて献堂の式を行ひ給ふに。妾。はたむしろの末につらなるが故に。をこのわざなから。一言とほぎ奉らむ。つら〳〵おもふに。大きみの明治の御世に産れ出たる人ばかり。幸多きハあらじ。今より五とせのむかしをおもひ。十とせのいにしへの事をきくに。學びの道の日にけに開けゆく有さまハ。さながら朝日の昇るか如くなむ。さてハ今より十とせをすぎ。二十とせをすぎたらむにハ。此の道ハ。いかにさかりになりて。人々のざねハ。いかにすゝむらむとも。中々にはかりしるべうもあらずかし。古き教に聖人ハよく世とおしうつるときく。今の御世に産れて。物學ばむ人ハ。をみなゝりとて。いかで男に立ち竝ぶ事のかたからむ。たゞねもころなる師につきて。教を受け。螢雪のいさををを積てむにハ。こゝろざしをとげざる事ハ。をさ〳〵あらざるべし。しかハあれど。ひたぶるに今やうにすゝみすぐるハよからず。さりとて又。世に後るゝハなほよからず。よくおしうつるてふ事のこゝろを心にさとるべきにこそ。既に此の學校を設けたるも。女をして男に立ちならぶべきざねを得せしめんとなるべしと思へば。あな貴の大きみの世や。あなめでたの學校の設けや。千世に八千世に立ちさかねて。年に日にけにみさかりなれ。と思ふこゝろをかくなむ

秋夜の言葉　佐々木綱子

秋の空やう〳〵にふけゆきて千草の花もとり〳〵にあはれふかきに月のあかき夜こそ哀さゝはたをかしさもことにいみしけれ學ひのまどのしやうじに松のかげのうつりてさなから繪にかきたるやうなる置きわたしたる露のうへにひかりきらめきて玉をしきたるか如くなるうごろに心も身にうハずうちながめつゝ夜のふくるをも知らずありけるにわらハべのこゑとして寢よとのかねの聞えけるものをといふにおどろきていと口惜しうおもふものから

〇愛の歌の譜　夢の舍　かをる（未定稿）

女學雜誌第七十三號の寄書欄内なる愛の歌（坦庵主人の作）を讀みて感ずる所あり乃ハち呂律を配して唱歌一つを作る



●新報

○婦人衛生會　去る廿三日午後二時より麴町小學校にて同會を開かる最初に荻野ぎん子同會設立の主旨を述べらる蓋し或人々は別段かゝる會を設くるに及ばず既に大日本私立衛生會と云へるも有之とゆへ之に合併して盡力せば宜しかるべきにと迄で申されたるが同會は學理も高く希望の大なる議論頗に行なわるゝとゆへ婦人方に差當り切要なりと覺ゆる事件は餘り研窮の少きが如く亦婦女子等が申す處そは同會にて最早左程の効能ありとも見做されず必竟男女教育の度の相違する點しさには斯る相違の起り來るとゆへ假令ハ後日には兩會相ひ合併するの運びと成るべきとも當今の景況にては矢張り別に婦人のみの衛生會あるを宜しと考へ擬ては之を創立するに至りたり云々の主旨なりき、次に坪井次郎氏家庭の衛生、加藤弘之氏衛生のこうのう の演說あり右二つとも後號に大意を掲ぐべし尤後鈴木清水兩氏が同會に付ての祝辭などあり五時前に散會し茶菓夕飯の饗應ありき、同會は加藤夫人を初じめ一百餘名の婦人方が熱心着實に盡力ある會合なれば追々に隆盛に赴かんと必せり眞に道の爲に慶賀すべきと也

○婦人慈善會　皇后陛下には去る十七日午前十時御出門鹿鳴舘へ　開設の同會へ臨御あらせられたり 同會は十七、十八、十九の三日間なりしが其收入總計金は七千五百九十二圓七十一錢五厘にして內金千二百九十一圓は入場券料金千百八十二圓十二錢八厘は寄贈金五千百十九圓五十八錢七厘ハ三日間の賣上高にして 右は補充品賣高金千四百圓二十一錢を除きたるものなりと又入場人員は 三千二百二十六人にして前會に比すれば寂きにも拘わらず賣上高は割合に多しと云ふ

○產婆試驗　此程府廳にて執行したる本年第二期醫舖並に產婆 開業試驗に於て產婆の及第し今度內務大臣より免狀を下附したる人名は左の如し

　　美甘みつ　　丹羽象　　根本もと　　木村金　　川井てい　　松本巳亥
　　大西靜　　田中りう　　西尾とも　　沼田てる　　木村とよ

○櫻井りう子　櫻井海軍少技監の婦人りう子は東京女子師範學校の卒業生の由なるが三年間佛國巴里に留學の都合にて去る十九日夫省三氏と共に出發せられたり

○大津婦人慈善會　豫て有志の周旋奔走中なりし同會は去る廿日より開會せりと

○山口縣結婚者の數　山口縣に於て昨十九年中に結婚せし人員は初緣男、三千六百三十九人、女三千九百二十一人、再緣以上男、千五百二十八人、女千二百三十八人にして其年齡別左の如し　（第一三二〇號官報）

年齡	男	女
十二年		[illegible]
十三年		一〇
十四年	[illegible]	五〇
十五年	八	八六
十六年	七	二五一
十七年	二八	二六二
十八年	五四	二一四
十九年	三〇一	二五四
二十年	七八一	二九四
二十一年以上二十五年未滿	九〇五	一、三四八
二十五年以上三十年未滿	一、七〇五	[illegible]
三十年以上三十五年未滿	一、〇六〇	[illegible]
三十五年以上四十年未滿	[illegible]七五	一九二
四十年以上四十五年未滿	三〇[illegible]	[illegible]
四十五年以上五十年未滿	一五六	[illegible]六
五十年以上五十五年未滿	八〇	一九
五十五年以上六十年未滿	[illegible]	一
六十年以上六十五年未滿	二〇	[illegible]
六十五年以上七十年未滿	一三	二
七十年以上	八	
合計	[illegible]	[illegible]

○開業式　京都看病婦學校同志社病院同書籍舘の開業式は去る十五日午后二時同社公會堂に於て擧行せり當日臨席の人々は北垣京都府知事竹村杉浦兩區長坂原清永兩課長區書記猪子醫學校長外醫員上下京兩戶長郡區常置委員醫學士べレー氏同バックレー氏幷に同夫人同志社長新島襄氏以下同校の教員職員生徒及び有志の人にて來賓は六百二三十名なり席定まり唱歌を奏し順次に祝詞演說等あり午後四時三十分全く式を了り續て書籍舘にて來賓に茶菓を饗應せり同病院學校は 地所及び建築其他の費用共內外有志者の寄附金を以て 充てたるものにて內國有志の寄附金一千百三十四圓三拾貳錢外國寄附金は 六千百零五圓五拾錢合計七千二百三十九圓八拾貳錢にて實費七千貳百六拾三圓三拾九錢九厘に 比せば二十三圓五拾七錢九厘の不足なり併し尙は 諸地方有志者の義捐も追々到着し將來の資金も出來る勢なりと

○同病院學校の構造　病院は東向に入口ありて藥局會計局あり其下に 洗濯室あり夫れより患者扣所ありて 此所より双方に別れてドクトル、ベリー氏とドクトル、バックレー夫人の診察所に通ず 此一棟の各室は病症檢查診察所にて婦人の檢查室眼科室等あり一廻りすれば假檢尿室外科の施術室電氣室あり夫より 棟を隔てゝ產科幷に婦人科の病室とし何れも患者付添人の間を設け又重病室を置き 其他產婦室あり都て病室は甲部は一人宛とし乙部は五人宛とす 臥牀は極和かにして紅白の衾枕を据ね屋上は温熱の空氣を通はしむ便所は 和洋二タ通りあり浴室幷に洗場は水管を通す又棟を隔てゝ屍體室あり藥局掛其他 醫師の住宅又賄所あり又北手に當る看病婦學校は東西三十餘間南北六間の建物にして校內には體操所を始め讀書室、授業室、食堂等互に聯絡し裏手には浴室洗場あり而して同校の二階は未だ席を定めざるも是れは 生徒の寄宿舍に充る由又同學校病院とも昨日より其業を實行し居れり（十一月十七日中外電報）

○波多野領事の夫人　淸國天津の我波多野領事の夫人は去る八月中男兒を擧げられしが產後間もなく熱病に罹り遂に 異域の鬼となられしかば耶蘇敎式にて英國人墓地へ埋葬したる由

○產婆講習所講師　此程設置許可ありたる 古志郡長岡町なる產婆講習所の講師は內外科醫士屋哲三、產婆秋田梅次、同熊谷やす、同土屋よき、の四氏なりと（十一月十五日新潟日々新聞）

○婦人の傍聽　長崎縣會は是れ迄婦人の傍聽を禁じありしがこの程 師範學校女子部生徒よりの請求により 議長より議員一同へ協議し自今婦人に傍聽を許すことに決定したりと

○沖繩縣下女子教育　沖繩縣下にては 從來女子教育の如きは全く度外に置きたる有樣なりしが此三四年來俄か實行はれ日に増し隆盛に赴き現に那覇學區の女教塲に於て八十九名（之を尋常科一、二、三年級及び中等科一年級の四級に別つ） 首里學區女敎塲に於て九十九名（之を尋常科中等科に別ち總べて六級とす）にして總計百八十八人の就學生ありと云ふ

●社告

●本社へ御送金被成下候節當方の宛名は東京々橋區日吉町八番地女學雜誌社と致し郵便小爲替又ハ通常の郵便爲替とも芝口郵便局にて受取るべき樣御取組被成下度候

●御送金の爲換取組方實際不便利の地に御住居の方に限り壹錢郵便切手にて御拂込被成下候て不苦候

廣告

女學雜誌社出版書目

●善惡之岐　新刊

中島湘烟女史著

定價五拾錢　繪入　美本

●目次。野蠻とも言へ未開とも云へ實に太平の里なるべし。高島田にやの字の娘五分さかやきに‟無刀の浪士″紅潮端なく上る佳人の面。一樹の名花春動く初‟谿間の濟流も繁都の泥水なりしを知らずや。雙腕の勇餘ます所なく満腹の智遺す處ろなし。撫松庵のみ能く撫松庵の胸中を知れり。凝夢情煙春月晴。誰知一滴愛情水散湧奔波激涙來。世上の功名灰塵に異ならず。錢嚢痩腹裏飢以て天下の經濟を論ず。貧生の慷慨情むに足らず。當路の君子にして袖の下を嫌ふものあらじ。雙蝶花に戯れて春情あり。歡樂のある處悲愁の伏する處。姉妹の談濃かにして春恋の燭微かなり。怨みもなく怒もなきは交りと愛と共に新たなるによる。撫松庵が胸邊寒むく吹き送る隙間の風ぞ腥し。世難淵よりも深かく人情紙よりも薄すし。命離縁あり。應報爭さふべからず。優なる哉水聲人事の齟齬を嘲ける。情人の艶話唯だ聞くあるのみ。上帝親なく唯善人にくみす。客窓涙あり孝子の情。茲に困ありて茲に果なり。人間の歡樂一塲の夢。墜葉翻へつて力なく懶禽啼て恨あり。地下の白骨土いまだ冷かならず病窓の美人恨愈ゝ多し。開花原是落花風。人の死するや其の言ふ事や善し

●賣捌所○銀座博聞社、原金港堂

巖本善治篇

●木村鐙子小傳

定價十錢　郵税六錢

右は明治女學校生徒の爲め編輯し朋友知己に博く配分したるものなるがなほ殘餘あるを以て之を有志の人に頒つ書中勝海舟伯の題辭島田三郎外山正一兩君の序あり

○鈴木弘恭大人著述○小中村清矩大人評

●改正増補 文法口授　一名和文獨案内

定價拾八錢　郵税四錢

此書は文章家なる鈴木大人が多年諸學校の生徒に和作文を授業せられしを筆記したるものにて嚢に出版し大に諸校の賞用を得たれば倚又今般大人に乞ひ改正増補して古人の文章數十篇を巻尾に附し或は雅文を俗文に譯し或は漢文を和文に譯したる作例をも擧げたり然れば啻和文のみならず漢文を學ふ人の和文を漢文に譯するにも大に益あるべし且女學校などに於て和文を學んにとする生徒諸君の爲めには此に過ぎたる良書なかるべし

●右文法口授を學校教科用の書籍に適當なりとて發兌後一週日を經ざるに既でに成立學舍女子部及び頌榮女學校並に明治女學校長榮女塾の教科書となりたり

○鈴木弘恭君講述○山村亮作君筆記

つれ〴〵草講義

定價十二錢　郵税四錢　第一號

右は鈴木弘恭君の講義ありたるを山村君の筆記せられたるものにして其解釋の綿密なる一本を机上に備ふる時は五里の霧中を出でゝ霽晴朗々たるの天色を見る心地す四方の貴嬢諸子請ふ續々購讀あらん事を

○統計局次長世良太一君序○統計協會議員呉文聰君序

婚姻論

通今居士　横山雅男君著

○定價一冊三十五錢郵便税十四錢

右は横山雅男君が得意の統計學上より婚姻の定義其外早婚晩婚雜婚離婚などすべて婚姻に關係する事物は擧げて殘す所なく議論の確實なる擧例の精密なる世の父母たるもの亦た青年の男女の方々必讀の書なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

元老院議官從四位中村正直公題字
中江篤介先生序、望月雄五郎先生校閲
米國テオドルスタントン先生編著
日本住田頼之助先生譯述

西國婦人立志編　全

紙數　二百頁餘
定價金七十五錢

泰西婦人立志編近頃譯て梓に上す歐洲各國婦人の活動載て而て盡さゞる所なし政治の活動婦人の手にある彼の如んば快ならずや法律の活動婦人の手になる彼の如んば快ならずや道德教育美術の活動婦人の手にある彼の如んば亦快ならずや此に一あれば則以て快とあすに足る况んや各國活動歐洲婦人の擧て以て快とする所のものをや今世の最大快書と謂べきあり請ふ購讀を辱ふせん

出版元　東京日本橋區濵花町十七番地　錦光館　中村昌生
發兌元　東京々橋區和泉町五番地　山田活版所
大賣捌所　辻岡、神戸、國分、自由閣、丸善、博聞社、大倉、春陽堂、集成社、中西、其他各書林

生徒募集廣告

本校敎員增員致し候に付き寄宿生十名通學生三十名を募集す

明治二十年十一月

京橋區山城町四番地
婦人洋服裁縫女學校
校長　平島喜平
幹事　喜多見倫子
仝　貫名綾子

發兌	十月。四日　九日　十五日　廿六日 十一月。九日　十二日　十三日　廿八日 十一月。五日　十二日　十九日　廿六日 十二月。三日　十日　十七日　廿四日　三十一日
定價	一册。五錢　郵稅。一錢（但府內無郵稅） 十册。四十八錢郵稅。十錢（同前） 半年分　一圓十七錢　府外は　一圓四十三錢 一年分　二圓卅四錢　府外は　二圓八十六錢
廣告	特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を掲する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む 一行　一回（廿七字詰）前金拾錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen.* By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8, Hiyoshichō, Shinbashi, Tōkyō, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町巖々堂○東京芝西久保櫻川町萬春堂○東京神田區雉子町關々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新殻町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盤春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○東京本郷四丁目文壽堂○横濱伴吉町角田屋貞○京都四條通小橋へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版舍○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西內大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥平堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂

發行所　東京京橋區日吉町八番地　本局　女學雜誌社
持主兼編輯　巖本善治
印刷　森田豐